

氷と後光

宮澤賢治

青空文庫

「ええ。」

雪と月あかりの中を、汽車はいっしんに走つてゐました。

赤い天鵞絨の頭巾をかぶつたちひさな子が、毛布につつまれて窓の下の飴色の壁に上手にたてかけられ、まるで寢床に居るやうに、足をこつちにのばしてすやすやと睡つてゐます。

窓のガラスはすきとほり、外はがらんとして青く明るく見えました。

「まだ八時間あるよ。」

「ええ。」

若いお父さんは、その青白い時計をチョッキのポケットにはさんで靴をかたつと鳴らしました。

若いお母さんはまだこどもを見てゐました。こどもの頬は苹果りんごのやうにかがやき、苹果のほひは室いっぱいでした。その匂は、けれども、あちこちの網棚の上のほんたうの苹果から出てゐたのです。實に苹果の蒸氣が室いっぱいでした。

「どこどこでせう。」

「もう岩手縣だよ。」

「あの山の上に白く見えるの雲でせうか。」

「雲だらうな。しかし凍つてゐるだらうよ。」

「吹雪ぢやないんでせうか。」

「さうだな、あすこだけ風が吹いてるかも知れないな。けれども風が山のパスパサした雪を飛ばせたのか、その風が水蒸氣をもつてゐて、あんな山の稜の一層つめたい處で雪になつたのかわからないね。」

「さうね。」

月あかりの中にまっすぐに立つた電信柱が、次々に何本も何本も走って行き、けむりの影は黒く雪の上を滑りました。

車室の中はステイムで暖かく、わづかの乗客たちも大てい睡り、もう十二時を過ぎてゐました。

「今夜は外は寒いでせうか。」

「そんなぢやないだらう。けれども霽れてるからね。こんな雪の野原を歩いてゐて、今ごろこんな汽車の通るのに出あふと、ずるぶん羨しいやうななつかしいやうな變な氣がする

もんだよ。」

「あなたそんなことあつて。」

「あるともさ。お前睡くないかい。」

「睡れませんわ。」

若いお父さんとお母さんとは、一緒にこどもを見ました。こどもは熟したやうに睡つてゐます。その唇はきちつと結ばれて鮭の色の谷か何かのやうに見え、少し鳶色がかった髪の毛は、ぬれたやうになつて額に垂れてゐました。

「おい、あの子の口や歯はおまへに似てるよ。」

「眼はあなたそつくりですわ。」

山の雪が耿々と光り出しました。と思ふうちにいきなり汽車はまっ白な雪の丘の間に入りました。月あかりの中に、たしかにかしはの木らしいものが、澤山枯れた葉をつけて立つてゐました。

そしてみんなはねむり、若いお父さんとお母さんもうとうとしました。山の中の小さな驛を素通りするたんびにがたつと横にゆれながら、汽車はいつしんにその七時ななしくれ雨の傾斜をのぼつて行きました。そのまどろみの中から、二人はかはるがはる、やつぱり夢の中の

やうに眼をあいて子供を見てゐました。苹果の蒸氣がいつぱいだったので。電燈は青い環をつけたり碧孔雀になつて翅をひろげ子供の天蓋をつくつたりしました。

「ごごとごとごとごと、汽車はいつしんに走りました。

「おや、變に寒くなつたぞ。」

しばらくたつて若いお父さんは室の中を見まはしながら云ひました。電燈もまるでぐらくなつて、タングステンがやつと赤く熱つてゐるだけでした。

「まあ、ステイームが通らなくなつたんですわ。」

若いお母さんもびっくりしたやうに目をひらいて急いで子供を見ました。こどもはすっかりさっきの通りの姿勢ですやすやと睡つてゐます。

「どうしたんだらう。ああ寒い。風邪を引かせちゃ大へんだぜ。何時だらう。ほんのろつとしただけだつたが。」

時計の黒い針は、かつきりと夜中の四時を指し、窓のガラスはすっかり氷で曇つてゐました。

月が車室のちやうど天井にかかつてゐるらしく、窓の氷はただぼんやり青白いばかり、電燈は一そう暗くなりました。

「寒いねえ、もう一枚着せよう。」

「そんならわたしのコートやりますわ。」

「コートなんかぢや着ないも同じこつたよ。だまつて起しておやり。却つて一ぺん起した方がいいよ。同んなじ姿勢でばかり居たんだから。」

「ええ。ですけど大丈夫ですわ。外套はお脱ぎにならなくてもいいのよ。」

若いお母さんは、窓ぎはから子供を抱いて立ちあがりました。毛布は暖かいぬけがらになつて残りしました。こどもは抱かれたまま、やっぱりすやすや睡つてゐます。

「まあ着せとけよ。どうせおれは着てなくなつて寒くないんだから。」お父さんは立つて席の横に出て外套をぬぎながら云ひました。

「毛布の中へ包めばいいよ。そら。」

汽車は峠の頂上にかかつたらしく、青い信號燈や何かぼんやりと窓の外を過ぎ、こどもはまた窓のところに、前より少しうつむいて置かれました。深く息をしながらやっぱりすうすう寝てゐます。

たしかにそこは峠の頂上でした。にはかに汽車のあへぐやうな歩調がなくなり、速さは加はり、まっしぐらに傾斜を下つて行くらしいのでした。

間もなく電燈はさつと明るくなりステイムも通つて来て、暖かい空氣が窓の下の隅から紐のやうになつてのぼつて來ました。若いお父さんとお母さんとは安心して、またうとうと睡りました。外が冷えて來たらしく窓は湯氣が凍りついて白くなりました。そしてまた夢の合間あひまに、電燈はまばゆい蒼孔雀に變つて、紋のついた尾翅をぎらぎらにのばし、そのおいしさうなこどもをたべたさうにしたり、大事さうにしたりしました。

「ごのごとごとごとと汽車は走つたのです。

そしていつか汽車はとまつてゐました。

「盛岡、五分停車、盛岡、五分停車。」それからカラコロセメントの上をかける下駄の音、たしかにそれは明方でした。

（ふう、今朝ずるぶん冷えるな。）犬の毛皮を着たり黒いマントをかぶつたりして八九人の人たちがどやどや車室に入つて來ました。その人たちの頭巾やえり巻には氷がまつ白な毛のやうになつて結晶してゐて、ちよつと見ると山羊の毛でも飾りつけてあるやうでした。いつか窓はすっかり白く明るくなりました。電燈も水のやうでした。

「夜が明けましたわね。」

「うん。すっかり睡つちやつた。」

「ここ、どこでせう。」

「盛岡だらう。もうぢき日が出るよ。ああすつかり睡っちゃった。」

窓はいちめん蘭か何かの葉の形をした氷の結晶で飾られてゐました。

汽車はたち、あちこちに朝の新らしい會話が起りました。

(へえ、けれどもみそさざいなら射てるでせう。)

(いいえ、みそさざいのやうな小さな鳥は彈丸で形も何もなくありません。)

窓の蘭の葉の形の結晶のすきまから、東のそらの琥珀が微かに透いて見えて來ました。

「七時ころでございませうか。」

「丁度七時だよ。もう七時間、なかなか長いねえ。」

子どもが眼をさまして舌を出しました。

「おお、いいよ。泣かないわね。ずるぶんねんねしましたね。さあお乳をあげますよ。よ

うつと。」お母さんは子どもを抱きました。

「そんなに舌を出してはばけてはいかん。」若いお父さんはトランクから楊子を出しながら云ひました。

窓は暗くなったり又明るくなったり汽車はごとごと走りしました。

お父さんが洗面所から歸つて來ました。

俄かにさつと窓が黄金いろになりました。

「まあ、お日さまがお登りですわ。氷が北極光の形に見えますわ。」

「極光か。この結晶はゼラチンで型をそつくりとれるよ。」

車室の中はほんたうに暖いのです。

(ここらでは汽車の中ぐらゐる立派な家はまあありやせんよ。)

(やあ全く。斯うまるで病院の手術室のやうに暖かにしてありますしね。)

窓の氷からかすかに青ぞらが透いて見えました。

「まあ、美しい。ほんたうに氷が飾り羽根のやうですわ。」

「うん奇麗だね。」

向ふの横の方の席に腰かけてゐた線路工夫は、しばらく自分の前のその氷を見てゐました。それから爪でこつこつ削こぞげました。それから息をかけました。そのすきとほった氷の穴から駒くまんだ松林と薔薇色の雪とが見えました。

「さあ、又お座りね。」こどもは又窓の前の玉座に置かれました。小さな有平糖あるへいたうのやうな美しい赤と青のぶちの苹果を、お父さんはこどもに持たせました。

「あら、この子の頭のところで氷が後光のやうになつてますわ。」若いお母さんはそつと云ひました。若いお父さんはちよつとそつちを見て、それから少し泣くやうにわらひました。

「この子供が大きくなつてね、それからまつすぐに立ちあがつてあらゆる生物のために、無上菩提を求めらるなら、そのときは本當にその光がこの子に來るのだよ。それは私たちに何だかちよつとかなしいやうにも思はれるけれども、もちろんさう祈らなければならぬのだ。」

若いお母さんはだまつて下を向いてゐました。

こどもは苹果を投げるやうにしてバアと云ひました。すっかりひるまになつたのです。

青空文庫情報

底本：「宮澤賢治全集第六卷」筑摩書房

1967（昭和42）年9月25日初版第1刷発行

入力：土屋隆

校正：阿部哲也

2012年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

氷と後光

宮澤賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>